

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 中島 智章

この論文は、ヴェルサイユ宮殿と王権との関わりを追求することで、建築活動が、それを推進しようとする何らかの意志の表れという社会の営みの一つであり、建築家など建築関係者の意図の及ばぬところで展開する場合もあったことを明らかにするということを目的としている。

本論文は3部構成である。

第1部では「包囲建築」と呼ばれるル=ヴォー設計の新城館北棟と南棟に設けられた国王と王妃の各アパートマンが対象となる。ヴェルサイユ宮殿造営史の中でも、「包囲建築」の建設をめぐる多くの研究者が議論してきた。しかし、彼らの説の間には、たとえば、着工時期、競技設計に関する事情、着工案について大きな相違があり、これは建設長官コルベールの書いた3文書に日付がないことに大きく由来する。先行研究における関連史料の分析を比較することにより、着工時期やコンペで選ばれた案についてなど、幾つかの点が整理できた。しかし着工案の姿がどうだったのかなど、史料の分析だけでは自ずと限界があるので、今後の実測調査などが参照された。

その結果、当初から小城館の保存が前提とされていたことが分かり、また、コルベールの示した数値は、完成案以前に別の計画案が存在したことを示しており、彼の数値からそれを復元することも可能となった。

新城館北棟に設営された国王のアパートマンは、当初、7つの広間からなっており、それぞれ、七惑星を象徴する古代の神々が天井に描かれた。天井湾曲部には、中央の古代神に関連する諸美德、および、その諸美德の現れたる古代史の場面が描かれ、これらによってルイ14世の徳や広間の機能と結び付けられた。これは南翼の王妃のアパートマンでも同様である。しかし、先行研究によると着工案は竣工案とは別の姿をしていた。二つの案を比較して、その変更理由を考察すると、竣工案では広間数が一つ増えて七つとなり、寝室前後の広間数が等しくなったことから、太陽を中心とする七惑星主題がある程度の影響を与えたと考えてよい。

一方、王妃のアパートマンは宮殿中央軸を挟んで国王のそれと対称に配された。しかし、この配置はフランス王室の伝統ではないという。本論文では両アパートマンの対称性を確認し、当時の宮廷社会のあり方とスペインとの外交関係という内外の要素からその背景を考察している。

第2部ではルイ14世によって編纂された「ヴェルサイユ庭園案内法」を足掛りに当時の庭園の鑑賞の力点と方法や庭園自身の全体構成を明らかにする。

ヴェルサイユ宮殿の図像解釈学的研究は、1980年代以降、盛んに行われているが、「案内法」は記述の簡潔さゆえ、あまり参照されていない。しかし、そこで示された鑑賞法から庭園の全体構成を導き出すという点で有益な情報を提供するはずである。特に中央軸線と直角に交わり城館前を通る南北軸については、その存在を重視しなかったり、

南北軸を一体と見なす先行諸研究の解釈に対して、各眺望点からの鑑賞対象への視線を分析することにより、城館を中心として南北に分かたれるという説を提出することができた。

また、庭園のなかの噴水の実現には多大な物的・人的・知的資源の投入が必要だった。多くの試みの中で最も王を満足させたのが「マルリーの機械」である。その作者は誰かという点について、諸家の意見はレヌカンとドゥ=ヴィルの間で分かれており、一般には経験豊富な職人レヌカンの作だといわれている。本論文では、18世紀以来繰返されてきたこの論争を整理し、もって筆者自身の見解を明らかにした。

第3部では庭園の中央軸線の寓意物を検討していき、それを受ける位置にある鏡の間の天井画主題の変遷と、それが庭園と城館の関係に及ぼした影響について論ずる。

ヴェルサイユを飾る主要な絵画彫刻は、少なくとも1670年代まで、オウイディウスの「変身物語」の太陽神の宮殿を描いたくだりに基づく主題によっていた。その中でも「昇る太陽」を表すアポロンの戦車の泉水と「沈む太陽」を表現してるテティスのグロットは、同一軸線上にはないものの、中心軸を隔てて対のものとして構想され、しかもそこにルイ14世=太陽神のイメージが封じ込められた。ここに庭園の中央軸線は位置だけでなく、象徴の上でも宮殿の中核たりえたのである。

次に庭園中央にあるラトーンの泉水を取上げて、図像解釈学的側面と庭園構成が如何に密接に関わっているかを明らかにする。史料からは確実ではないが、太陽神の母神たるラトーンはルイ14世の母后アンヌ、蛙などに変身させられている周りの人々はフロンド党だと信じてよい。ヴェルサイユ遷都の一因ともいわれるフロンドの乱を表した群像を中央に置くことによって、この宮殿の誕生を顕彰している可能性がある。このようにラトーンの泉水は位置的かつ象徴的にも庭園の中心なのである。

これら「太陽の軸線」の寓意物をファサード上で受けるのが黄道12宮擬人像群である。これらは西洋の慣例に反して右から左へ白羊宮=3月から順番に配置された。理由として、「春」を南、「冬」を北というように四季と方位を結び付けたということや、庭園からの眺めではなく城館内部から見て左から右に流れるように配置したのだということが挙げられるものの、何れも説得力に欠ける。ヴォー=ル=ヴィコントの楕円形大広間の天井画周りの寓意物の検討から、筆者は天球における黄道12宮の配列法に従ったのではないかと考えた。

実はヴォー=ル=ヴィコント城館こそ、ヴェルサイユ宮殿の太陽神神話に関わる図像主題の供給源だったのである。本論文では具体的にそれを指摘している。

そして、最後に庭園中央軸線と鏡の間を対象にして、天井画計画の図像主題の変遷を追いながら、その意味するところや城館と庭園の関係に与えた影響について論じる。この歩廊は、マンサールの登場、離宮から首都へという宮殿の性格の変化、鏡を用いた新しい美学の実践などの見地からも重要な転回点を画した。一方、当初の天井画主題は太陽神アポロンを中心としたものだったが、そこからヘラクレスの12の功業へと移行し、さらには神話を止めてルイ14世自らが主人公となる。つまり、図像解釈学的側面でも一大画期だった。しかし、それに伴って、当初は「太陽神の宮殿」の要として庭園とも密な関係を持っていたにも関わらず、最終的にはそれと全く異なる戦争の要素が導入され、

全体の調和は保てなくなってしまったのである。

本論文はヴェルサイユ宮殿とその庭園の建築計画と図像配置という、これまでさまざまに論じられてきたふたつの部分とふたつの側面を、総合的なかたちで説明しようとするものであり、きわめて野心的な試みである。こうした論考は、資料の収集・分析と実際の遺構の調査の両面にたった研究であり、建築史学に新しい知見をもたらしたものである。その成果はフランス古典主義建築という、わが国では研究者の層の薄い分野における貴重な研究業績として、価値が高い。

こうした成果にいたる過程は、日本における西欧近代建築史研究の方法においても新しい可能性を開いたところがあり、日本における今後の西洋建築史研究にとって刺激となるものである。その意味で、本論文が明かにした事実と、そうした事実を明かにするための方法との両面において、本論文は価値がある。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。